

特別展

# 木製品にみる古代人のくらし

2008.1.25 ~

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



## 一木製品にみる古代人のくらしー

木は古くから道具として使用されています。加工しやすい木の製品は、古代人の生活にとって大変便利な道具であったと思われます。しかし、有機物であるがため長期間遺存することは少なく、発掘調査で発見される機会も多くはありません。しかし、近年の大規模な発掘調査により、少しずつですが発見例も増え、当時の生活の様子も徐々に分かってきています。今回は県下の発掘調査で出土した木製品を時代ごとに展示していきます。

### 縄文時代

高知県では居徳遺跡群（土佐市）から古くは縄文時代晩期に使用された木製品が出土しています。

#### 鋏

居徳遺跡群（土佐市）の埋没旧河川から柄を装着した状態で出土しました。長さ30.4cm、幅11.6cm、厚さ4.8cmを測りますが全長は不明です。表面には石器による加工の痕がみられます。中央からやや外れた位置に径3.6cmの柄を差し込む孔があり、約70度の角度で装着するものと考えられます。材質は柄がサカキ、身の部分はアカガシで作られています。



鋏



木胎漆器

#### 木胎漆器

隅丸方形をした、蓋の可能性が高いものです。外面のコーナー部にはブタ鼻状の突起があります。外面の各区画内と凸状部分には水銀朱を顔料とした朱漆で花卉状の文様を描いています。内側は黒漆が塗られ、文様はみられません。補修孔が口の部分に3個、体部に1個あり、この内口の部分の2孔にはの補修紐が残っています。

#### 大洞式土器

居徳遺跡群からは東北地方からもたらされた土器がみつかっています。土器の表面に黒漆と朱漆を重ねて塗彩したもので、大変鮮やかで美しいものです。そして、この形をまねて、地元でも土器が作られています。当時の人々にとっては、赤色と黒色の土器は特別なモノであったと思われます。



大洞式土器

## 弥生時代・古墳時代

弥生時代は米作りが定着・普及し、今日の私たちの食生活の基礎をなした時代と言えます。

当時は、土でつくられた土器の他に、木でつくられた器や道具類が多く使われています。特に米作りのための農具類は、人々の生活にとって必要不可欠なものであったと思われます。

木の加工には初め石器が使われましたが、その後の鉄器の普及により、整形・加工の技術は著しく発達したと考えられています。

県下では鋤・鍬・竪杵などの農具の他、容器や建築部材などが発掘調査でみつかっています。

### 鋤

下分遠崎遺跡(香南市香我美町)からは弥生時代中ごろの鋤先が出土しています。身の部分と柄の部分を一本から作り出したものではなく、柄を組み合せ、紐で固定し使用したと思われます。材質はアカガシ亜属で、形状はスコップ状をしています。

### 鍬

西ノ谷遺跡(四万十市)と居徳遺跡群(土佐市)から弥生時代前期の鍬がみつかっています。ともに平鍬で、柄の部分はみつかっていませんが、柄を差し込む孔が開いています。



下分遠崎遺跡出土の鋤



居徳遺跡群出土の平鍬



## — おもしろい形をしたの木製品 —



弥生時代の後期から古墳時代になると、たくさんの鍬がみつかっています。特徴的なものとしては、ナスビ形(ナスビ形)の木製品があげられます。ナスの形状に似ていることからこう呼ばれていますが、へたに似た部分への柄の付け方により、鍬になったり鋤として使用したりと大変便利な農耕具であったようです。



居徳遺跡群のナスビ形木製品



八田神母谷遺跡のナスビ形木製品



### たてぎね よこぎね 堅杵・横槌

居徳遺跡群(土佐市)や柳田遺跡(高知市)からみつかっています。ともにモノをたたかための道具ですが、<sup>たてぎね</sup>堅杵は長い棒の中央部が持ち手、両端部が<sup>つ</sup>搗き部となっています。<sup>つ</sup>搗き臼とセットで使用されたもので、<sup>こくもつ</sup>収穫した穀物の<sup>だっこく</sup>脱穀や<sup>もみす</sup>籾摺り、<sup>せいふん</sup>製粉等に使用されたものと考えられます。<sup>よこぎね</sup>横槌はその形態によってたたくモノが異なりますが、主に<sup>わらう</sup>藁打ちや<sup>まめう</sup>豆打ち、<sup>こうぞう</sup>楮打ち、<sup>めんう</sup>棉打ち等に使用されたものと考えられています。ともに<sup>しゅうかく</sup>収穫した農作物を加工するための便利な道具で、古代の人々にとっては、<sup>ちようぼう</sup>大変重宝した道具であったでしょう。



居徳遺跡群出土の堅杵



北ノ丸遺跡出土の田下駄

### たげ た 田下駄

<sup>いとくいせきぐん</sup>居徳遺跡群・<sup>きたのまるいせき</sup>北ノ丸遺跡(土佐市)、<sup>はたいげだに</sup>八田神母谷遺跡(いの町)でみつかりました。主に<sup>すいでん</sup>水田などの<sup>しつち</sup>湿地で作業をする際、<sup>あし</sup>足が沈み込まないために使用したものです。<sup>いとくいせきぐん</sup>居徳遺跡群や<sup>きたのまるいせき</sup>北ノ丸遺跡では10点以上出土しています。中には、<sup>てんよう</sup>曲げ物の底板などを<sup>てんよう</sup>転用したものもみられます。

### もくすい 木錘

木製の<sup>おもり</sup>錘です。<sup>つち</sup>槌の子とも呼ばれます。<sup>いとくいせきぐん</sup>居徳遺跡群や<sup>きたのまるいせき</sup>北ノ丸遺跡(土佐市)、<sup>やなぎだいせき</sup>柳田遺跡(高知市)などから出土しています。中央部に切り込みを入れたものや、中央部を斜めに削り込んだ形が見られます。<sup>せきせい</sup>石製や<sup>どせい</sup>土製の<sup>おもり</sup>錘は主に<sup>ぎよろう</sup>漁猟等で使われていますが、<sup>もくすい</sup>木錘は<sup>たわら</sup>俵や<sup>むしろ</sup>蓆などを<sup>ひも</sup>編む際に<sup>なわ</sup>糸(紐や縄)を巻いていたもので、<sup>あみだい</sup>編台とともに使用されたものと考えられます。



居徳遺跡群出土の木錘



柳田遺跡出土の梯子

### けんちくぶざい 建築部材

<sup>はつちつちようさ</sup>発掘調査では、建物に使用されたと考えられる加工された<sup>いたざい</sup>板材などが多くみつかります。<sup>やなぎだい</sup>柳田遺跡(高知市)、<sup>いとくいせきぐん</sup>居徳遺跡群(土佐市)、<sup>はなのえんいせき</sup>花宴遺跡(香南市)、<sup>きたのまるいせき</sup>北ノ丸遺跡(土佐市)からは、<sup>たかゆかしきそうこ</sup>高床式倉庫に使用されたとされる<sup>はしご</sup>梯子や<sup>かべざい</sup>壁材などが出土しています。

## 琴

北ノ丸遺跡(土佐市)では、古墳時代後期の共鳴槽をもつ琴がみつかりました。長さ約73cm、幅13cm、厚さ約1cmで、琴尾には3個の突起がありますが本来は5～6個の突起であったと思われます。柳田遺跡(高知市)から琴柱の出土例はありましたが、琴本体の出土は高知県では初めての発見となります。共鳴槽をもった琴の調べは当時の人々にとって魅力的だったにちがいありません。



北ノ丸遺跡出土の琴



柳田遺跡出土の琴柱

## 蓋の鏡板

同じく北ノ丸遺跡から発見されました。身分の高い人の行列などの時に頭上高く差しかける日傘の部品ですが、遺跡では、祭祀用の木製品として使用されたと考えられます。

古代律令制のもとでは階級や身分を表し、その権威の象徴となるものでした。

正倉院宝庫には、傘骨と天蓋、また法隆寺にも傘骨が伝えられています。しかしながら、古墳時代以前については、どうやら現在のところ蓋がどのようなものであったのか、その実体は不明で埴輪から推察するしか方法はないようです。



北ノ丸遺跡出土の蓋の鏡板



## — 祭祀に使われた木製品 —



発掘調査では祭祀に使用されたとされる木製の道具も出土します。弥生時代後期から古墳時代には鳥の形を模した木製品や舟を模倣したミニチュアの木製品等がみつかります。形は少し変わりますが、中世にも舟形の本製品が出土しています。また、古代になると、薄い板材で、人の形を模した人形や斎串などもみられます。

鳥形は農耕祭祀や葬祭儀礼に用いられたとも考えられます。また、舟形木製品は中世では、船出の安全祈願を行ったものとも考えられています。

そのひとつひとつには、当時の人々の願いが込められているようです。



花宴遺跡出土鳥形木製品



居徳遺跡群出土の舟形木製品



## 古代・中世

古代では、西鴨地遺跡(土佐市)から祭祀に使用されたと考えられる人形や斎串、服飾具としての横櫛が出土しています。中世になると、木製品の出土例も多くなってきます。椀・箸・曲げ物など日常的に使われた食器類や下駄などの服飾に関係するものもみつかっています。

### 横櫛

西鴨地遺跡(土佐市)から横櫛が出土しています。長さは推定9.2cm、幅3.6cmの長方形で、材質はイスノキを使用しています。1cmあたり11本の櫛歯を作り出しています。このような形態の櫛は8世紀には登場し、10世紀頃まで続いていたようです。



西鴨地遺跡出土の横櫛

### 下駄

船戸遺跡(四万十市)や林口遺跡(土佐市)からみつかっています。船戸遺跡の下駄の場合は、台と歯の部分は一木からつくられています。歯の部分は、少し外開きを作りだされています。林口遺跡では前歯ははめ込めるように差し歯形態をとっていますが、後歯に関しては、一木から削り出されています。



林口遺跡の下駄



船戸遺跡出土の下駄



## ゆうび もくせいひん — 優美な木製品 —



林口遺跡(土佐市)から出土した蝙蝠扇です。扇には杉や桧の薄い板材を数枚重ねて、下端を綴じ、端を糸でつなげた桧扇と蝙蝠扇のように、扇骨を数本重ねたあと下端を綴じ、片面に紙を貼って使用したものがあります。蝙蝠扇という名称は蝙蝠の翼の形に似ていることから呼ばれているのではなく、紙を貼る「かみはり」から生まれたものだと考えられています。遺跡からは屋敷跡もみつかっていますので、この扇を手にした人物が居住していたものと思われます。



林口遺跡出土の扇

わん はし  
椀・箸

はやしぐちいせき ふなとい  
林口遺跡(土佐市), 船戸遺跡  
せき さかもといせき  
跡・坂本遺跡(四万十市)から、みつかっています。

わん  
椀では、黒漆と朱漆を重ねて塗ったのものや、黒漆に朱漆で花や草の模様を描いた  
具同中山遺跡群の椀  
ものがみられます。また、こう  
台が低いものや、高いもの、形が深く作られたものや浅く作られたものなど、様々なわんがあります。



具同中山遺跡群の椀



林口遺跡出土の箸

はし  
箸は板材を棒状に小割りにした後、角張った部分をめん  
面取りするように整形したものが多く、また、端にいくほど細く、丸く加工しています。持ちやすいように加工にも工夫がされています。

わん はし  
椀も箸も現在私たちが使っている形のものとほとんど変わっていないことが分かります。



—先人の智恵が生んだ建築—



ぐどうなかやまいせきぐん  
具同中山遺跡群(四万十市)からは、県下  
で確認されている中世建物の中で、最も大  
きい建物跡がみつかりました。はりま  
大きい建物跡がみつかりました。梁間(建物  
の短い方向)が4間(9.3m)、けたゆき  
桁行(建物の長い方向)が6間(13.8m)で面積は128㎡を  
めんせき  
測る総柱の建物跡です。柱は抜き取られて  
そらばしら たてものあと  
いきましたので、残っていませんでしたが、  
柱穴の底からは方形をした礎板がみつかり  
ました。

そばん  
礎板は建物の土台となる柱などを支える  
板のことです。ぐどうなかやまいせきぐん なかすじがわ  
具同中山遺跡群は中筋川  
はんらん  
の氾濫によって形成された、大変じばん ゆる  
地盤が緩い場所ある遺跡です。その緩い地盤に建物が沈み込まないように、そばん  
礎板を置き、柱を立てたものと考えられます。その土地柄に住まう先人の智恵が支えた建物であったと言えます。



具同中山遺跡群の総柱建物跡



礎板



編集・発行

財高知県文化財団埋蔵文化財センター



発行年月日

2008年1月25日

\*表紙は花宴遺跡(香南市)の発掘調査の様子です。  
遺跡からは、弥生時代自然流路とともに、木を組んだ堰がみつかりました。